

ブナの木は山地帯の種と考えられており、通常は標高 1,000 メートル以上の場所で育つが、みなかみは気候が寒冷なため、標高 600 メートル程度の場所でも見ることができ、山の低温過湿な環境による多雪にうまく適応している。この木が寒さに強いのは、若葉が芽吹く時期が比較的早いことをはじめ、主に 3 つの特徴が理由となっている。ブナの木が葉を出すのは 4 月中旬だが、この時期、地面はまだ雪に覆われており、他の植物はまだ活動していない。日光のような資源をめぐる争ううえで、このことがブナの木を一足早く有利に立たせている。もうひとつは、秋になるとブナの実が地面に落ち、その実が何か月も溶けない厚い雪にすぐに覆われる点である。このように雪に覆われることで、実はネズミなどの動物から守られ、生き残り、春に芽を出すことができるのである。最後の特徴は、幹がしなやかなため、圧縮された雪の重みにも耐えられる点である。このしなやかさのおかげで、浅い根が引き抜かれたり、豪雪で傷ついたりすることを防ぐことができる。

ブナの木は、そこからできる種を介して地域の自然環境にとっての重要な役割を担っており、そのライフサイクルは森に住む動物に直接の影響を与えている。ブナの木は樹齢は通常 200 年ほどであるが、この木は倒れて朽ち始めたあとも周囲の生態系を支え続けている。林冠に新しくできた隙間から入ってくる日光によって、倒れた木の代わりに若木が育ち、また、腐敗した木はキノコ類の養分となる。そして今度はそのキノコをネズミやウサギなどの動物が食べ、その動物が朽ちた木の幹に住処を作るのである。

1972 年、谷川岳の北を源とする利根（とね）川の支流・湯楡曾（ゆびそ）川沿いで、ヤナギの新種が生息しているのが発見された。植物学者の木村有香（きむらありか）（1900～1996）が発見しユビソヤナギ（*Salix hukaoana*）と命名されたこの種は本州北東部でしか見ることができず、谷川連峰南東の山間部を流れる比較的浅い川沿いの氾濫原にのみ生息している。絶滅危惧種のため、その自然生息地のひとつを保護する目的で、土合橋（どあいばし）から湯楡曾川のマチガ沢出合までの一帯が群馬県の天然記念物に指定されている。ヤナギ属の中でも背が高い部類に入り、樹高 15 メートル、胸高直径 60 センチメートルに達することもある。また、内皮の鮮やかな黄緑色も特徴である。